

宗教学宗教史学

◇教員◇

教授：池澤優、藤原聖子

准教授：西村明、渡辺優

専任講師：志田雅宏 助教：佐藤清子

◇学生◇

学部：33名、修士課程：9名、博士課程：26名

(1) 宗教学を学ぶとどうなるか

話題の ChatGPT に「宗教学を学ぶとどんないいことがありますか？」と聞いてみた。回答は以下の通り（2023年3月現在）。

1. 文化的理解の向上

宗教は、世界中の文化や歴史に深く根ざしているものです。宗教学を学ぶことで、異なる文化や信仰について深く理解することができます。これにより、異なる背景や信念を持つ人々とのコミュニケーションや対話がより効果的になります。

2. 倫理的な洞察力の向上

宗教学は、倫理的な価値観や規範を研究する学問です。宗教が持つ倫理的な考え方や実践を学ぶことで、自己理解が深まり、より良い人生を送るための指針を見出すことができます。

3. 社会的観察力の向上

宗教学は、社会的な現象としての宗教を研究する学問です。宗教がどのように社会や政治に影響を与えるかを学ぶことで、社会や政治の動向を理解する観察力が高まります。

4. 宗教間の対話と共存に貢献

宗教学を学ぶことで、宗教間の対話や共存に貢献することができます。異なる宗教に対する理解を深めることで、宗教的な寛容性が増し、宗教間の対話や共存を促進することができます。

5. 自己探求と精神的な成長

宗教学は、自己探求と精神的な成長に役立つことがあります。宗教的な実践や思想を学ぶことで、自己探求を深めることができます。また、宗教が持つ精神的な側面を理解することで、精神的な成長を促進することができます。

さすが ChatGPT、気持ちを前向きにしてくれる名答だ。2年間の学びでこれだけのことが身についたら素敵だと思った人には意外かもしれないが、

実は、本専修課程の学修効果はこれら5点に留まらないどころか、これらを見る眼が変わってくるところにある。どう変わるのか。

1は一見もっともだ。「日本には特に宗教を敬遠する人が多いから宗教リテラシーがっそう必要だ」などという。だが「日本人は無宗教だ」という説は正しいのか？その場合の「宗教」とは何なのか？

2は宗教学の授業の間接的効果だ。確かに価値や倫理の領域に踏み込むが、教員が特定の教えを示し、それに従えばより良い人生が送れると説くことはない。それは各学生の自由に任されている。

3は全くその通りだが、なぜ宗教→社会・政治だけで逆向きの影響関係については触れていないのだろうか？あるいは、そもそも宗教は政治に影響を与えてよいのかと疑問に思う人もいるだろう。そこはどう考えるべき？

4ももっともらしいが、異なる宗教を知ることは常に宗教間対立を減らすだろうか？キリスト教と仏教の間よりも、違いの小さそうなキリスト教とイスラム、ユダヤ教の間で対立があるように見えるが、それはなぜか？

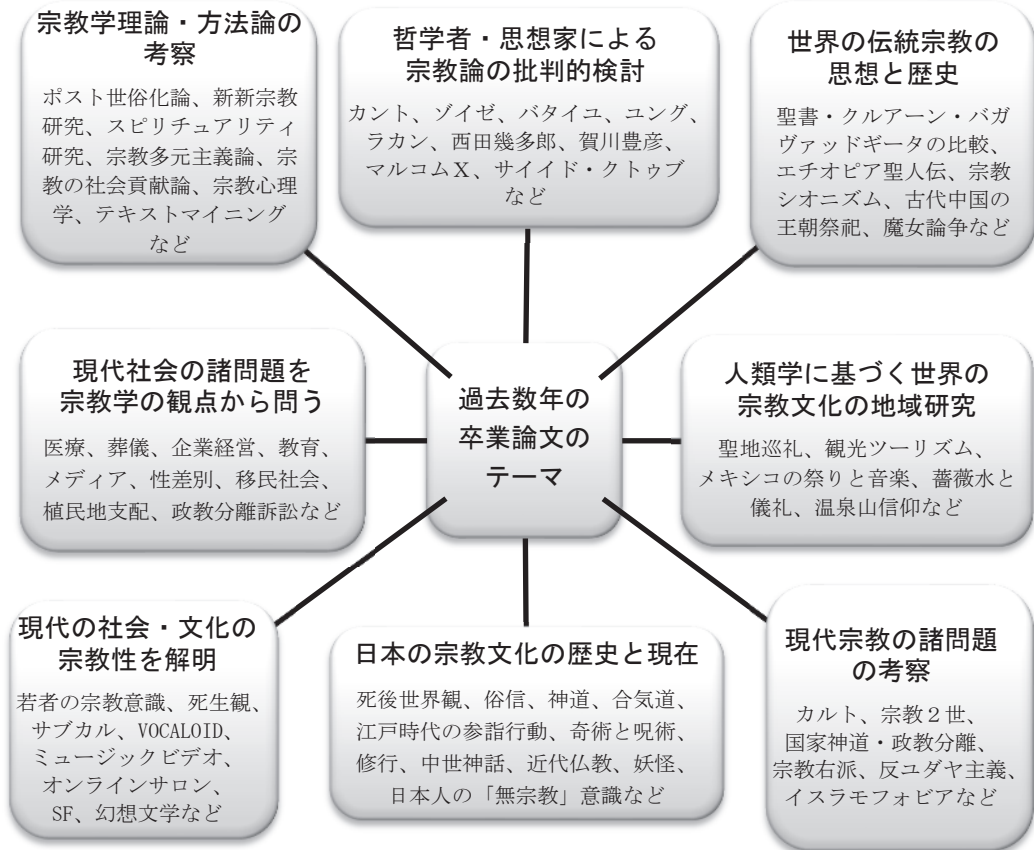
5は2と同じく副次的効果だ。時間がゆっくり流れる文学部では、5のためにひとり静かに宗教書に向きあうことも可能だ。しかし教員は悩める学生を導いてやろうというおせっかいはしない。それに精神的成長のものさしはそんなに自明なものなのか？

1～5の全体について気になるのは、いくつかの前提が潜んでいることである。まず、学びを人生や社会に「役立たせよう」という意識がいささか過剰なこと。これは「どんないいことが」という質問のせいかもしれないが、何のために役立たせようとしているのかを見極めずにただ従う態度には危うさも潜む。また、学ぶ側が宗教・信仰を持っていること、あるいは宗教は良いものだということが前提されていないだろうか。ここから裏返しにわかるのは、ChatGPTのデータソースは、社会の多くの人が宗教的信仰を持つか、持つことにさほど抵抗がなく、さらにコスパを重視する国がメインだということ。それが世界の標準になる前に、その底にある価値前提を見抜ける本専修課程で学ぶことは誰にとっても力になるだろう。

(2) 学生の関心

本専修課程に集まる学生の問題関心は多彩である。それも研究の分野や方法論が多様なだけでなく、学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは卒業論文のテーマにもよく表れている。

研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっている。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。



(3) 専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を

突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分映し出す合わせ鏡であったりするるのである。つまるところ、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。歴史に学び(宗教史学)、理論を検討し(宗教学)、人間と文化を見る目を養ってほしい。講義と演習はそのために用意されている。

授業の区分

宗教学概論

宗教史概説

宗教学・宗教史学特殊講義

宗教学演習

宗教史学演習

(4) 教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、(平成27年度より)指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

池澤 優：学部で古代中国の祭礼へ関心を持って以来、中国宗教の研究を志し、甲骨・金文を材料に中国古代の祖先崇拝を分析、その研究を基礎にして祖先崇拝・死者儀礼の比較研究、死生学、生命倫理を視野に入れる。

(2023年度で定年退職予定)

藤原 聖子：学部では宗教を理解するとはどういうことかという方法論的関心から出発し、西洋近代的な枠組みに基づく宗教学の理論を比較研究のためにどう組み直すか、変化する現代の宗教の諸相をどうとらえるかに取り組んできた。本年度は、現代宗教現象を読み解くための諸理論を事例につき合わせながら磨いていく講義と演習、従来の世界宗教史叙述を根本的に見直す講義、陰謀論など一般には宗教ではないと思われている現代の現象を「虚構」をキーワードに宗教学的に分析する演習、2年生内定者向けに宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする導入科目を開講している。

西村 明：卒論の供犠論以来、他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、非常時の犠牲者の慰霊を通して、生者にとって死者とは何（者）かという問いを探究している。平和祈念館等の追悼的要素や、広くミュージアムという世俗空間における宗教的文物の扱いも目下の関心事である。本年度は近現代日本宗教史の概説講義のほか、演習では占領期の宗教政策についての論文集や、儀礼論の文献を講読し、研究室所蔵の脇本平也名誉教授の研究・教育資料の分析を行う。

渡辺 優：「他者学」としての宗教学に惹かれ、信じる者の言葉を共感的かつ批判的に吟味することの醍醐味を知り、宗教思想研究へと向かう。スペインやフランスを中心に近世西欧キリスト教圏に輩出した神秘主義文献の考究を軸に、「神秘主義」概念の再定義を目指すとともに、神秘主義をそれ自体ラディカルな他者学として現代に再解釈することを企図している。本年度は、西洋神秘主義思想史を通覧する特殊講義を担当するほか、演習ではキリスト教神秘主義関連の論文集、ピーター・バーガー、ミシェル・ド・セルトーを講読する。

志田 雅宏：学部では聖書のヨブ記の解釈をユダヤ教とキリスト教において比較し、大学院では中世スペインのユダヤ教思想を研究した。現在は、中世ユダヤ教世界における宗教論争を専門とする一方、現代的な諸問題にも関心を持つ。本年度は、ユダヤ教概説の講義と中世ユダヤ教思想（イエフダ・ハレヴィ『クザリ』）の講読演習を担当する。

佐藤 清子：学部以来、アメリカ合衆国を地域的対象に研究を行ってきた。歴史研究を中心としつつ、現代アメリカ宗教の動向にも常に注目し、近年は政教関係・宗教の自由の歴史を軸に探究を続けている。本年度は特殊講義として、アメリカ合衆国の宗教の自由の展開を通史的に扱う。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

（5）卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承しつつ新たな問いを発していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場

となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは平成9年度から始められた試みであり、毎年Aセメスターに開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあるが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

(6) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典や入門書がそろい、プリンター、コピー機があって、発表の準備にはとても便利だ。相談役の助教、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大テーブルを囲んでの、学問的な語らいや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは1泊2日の研究室旅行である。学部生・院生・教員の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、3年生の歓迎会の意味もある。

(7) 卒業後の進路

就職先は、公務員・コンサル・情報通信・金融など、文学部全体の傾向とほぼ同じである。在籍中に宗教学独自の資格「宗教文化士」を取得することもできる。世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定される。研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。